

3年1組

思いを寄せて

～ツムピーをきこうとする中で わたしになっていく～



お嫁さん、大丈夫だよ



ツムラ本店の津村さんのところへ、ツムピーのお嫁さんを迎えに行ってきました。小さい雛だったツムピーの時とは違い、75日目で大きく白く成長しているお嫁さんとの長距離ドライブ。暴れたり、鳴いたりするのではなく、ひたすら怯え、固まっているお嫁さん。目が合うと、息が荒くなり警戒するお嫁さん。そんなお嫁さんを見ると、たくさんの子もたちのいる前にいきなり連れて行くことができませんでした。そこで、まずは車内でのお嫁さんの様子を録った動画を子どもたちと見ることにしました。すると、「なんか怒ってるみたい

で怖い」「顔色が悪い気がする」「目のところにしわがある」「睨んでるみたい」と、お嫁さんの表情や雰囲気からお嫁さんの気持ちを感じようとする子どもたち。Yさんの、「怒ってるのは怖いからじゃん。だからいきなり教室に連れてくるのはかわいそうなんだよね。でもさ、やっぱり見てみたいな、お嫁さんに会いたい」という言葉をきっかけに、5人ずつ、静かに、学年室にいるお嫁さんに会いに行くことにしました。子どもたちは、そーっとそーっとお嫁さんに近づくと、小さな声で「お嫁さん、私たち怖くないよ」「来てくれてありがとう」「お嫁さん、大丈夫だよ」「仲良くなろうね」と伝えていました。その声の大きさ、表情、お嫁さんに近付き過ぎない距離感に、子どもたちのお嫁さんへの配慮や気づかい、優しさを感じました。また、ツムピーと出会った日、自分たちの見たい、触りたい、という気持ちで接していた子どもたちが、自分たちの見たい、触りたいという気持ちよりも、お嫁さんに合わせながら、お嫁さんに寄り添った姿に変わっていることに、成長を感じました。



教室に戻ると、子どもたちは、「かわいかった～!」「なんか車の時より、表情良くなってるきがするんだけど」「顔色もちよっと良くなったよ」「ツムピーとくちばしの色が全然ちがう!」「いや、ツムピーにそっくだよ」と、お嫁さんとの出会いの嬉しさを語り始めました。何人かのスケッチブックの感想を紹介します。

- お嫁さんはやっぱり可愛いなと思っていそうだった。でもやっぱり、かわいかった。「だれだこの人たち」みたいな顔をしていたから、なかよくできるかな?お嫁さんも本当はなかよくしたいかもしれないと思います。(Mさん)
- きのうより、少し安心しているようだった。お嫁さんを見て、がんばってお世話したいって思った。(Tさん)
- お嫁さん、ここは楽しいところです。だから、怖がらないでください。いっしょにあそびましょう。少しかいけど、オスのツムピーもまっています。早く大きくなってね。あと、アヒルのことも教えてください。(Sさん)
- わたしが「あんしんしていいよ」って言ったら、およめさんがうなずいたよかんがした。「また来た」って思ったのかも知れない。(Mさん)
- およめさん、ツムピーとしあわせになってね。かぞくといっばいたのしんでね。しあわせになってね。(Eさん)
- ツムとおよめさんをしあわせにする。まずはおよめさんがいかくしないようにしたい(Kさん)
- およめさんのために何ができるかな(Kさん)

じっと動かないお嫁さんに、大きな声は出せないけれど、一生懸命思いを伝えていたのだと思います。

次の日も変わらず威嚇するお嫁さん。Iさんの「ツムピーはすぐ慣れたけど、およめさんはすぐ慣れない」という言葉から、お嫁さんの気持ちや状況をみんなで考えました。Rさんが、「ツムピーは赤ちゃんで来たからツムラ本店のことよく知らないけど、お嫁さんは75日ツムラ本店にいて、アヒルの仲間といたから、慣れないんだよ」と語り、Sさんが「怖がらせたくないけど、はやく一緒にいたい」と伝え、どうしたら慣れてくれるのか、いつから教室に連れてくるのか、話し合いました。「アヒルは集団で過ごすから、慣れなくても1人で過ごすほうがさみしいんじゃない。早く連れて来たい」「少ない人数から多い人数に少しずつ増やすのはどう」「時間を増やしていけば」と、アイディアはたくさん出ますが、本当のところは分かりません。クロームブックで調べ始める子もいましたが、詳しくは分かりませんでした。目の前のお嫁さんの様子と、アヒルにとっての本当をすり合わせながら、お嫁さんにとって一番安心できる時間と場所を作りたいと願い始めた子どもたち。もちろんそこには、早く自分たちと一緒に近くで過ごしたいという願いもあるからだと思います。お嫁さんの姿を受け止めながら、お嫁さんと仲良くできる方法を探してきたいと思います。

「こはくがんばれ」



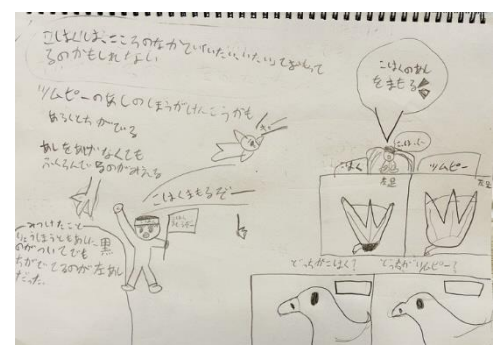
子どもたちのこの「目」を見てください。私は、暴れてしまうこはくに薬を飲ませることに必死で、周りの子どもたちのことを見ることができません。後から、有賀先生が撮影してくださったこの写真を見て、子どもたちの思いが伝わってきて胸が熱くなりました。こはくに薬を飲ませているとき、「こはくがんばれ」「こはく大丈夫だよ」「かわいそう」「(息を止めていて)…っは～」と聞こえてきた子どもたちの言葉。この目や表情を見た時、こはくを心配する気持ちや一生懸命応援する子どもたちの気持ちの大きさに改めて気づきました。

水曜日、こはくを動物病院に連れて行きました。原因はこはくの嘔吐と、足の裏の病気、しりゅう症です。

クラスに迎えた時から足の裏に黒い「できもの」を見つけていた子どもたち。本や図鑑に載っている情報から、「しりゅう症(バンブルフット)」ではないかと心配していました。足の裏にあるのでよく観察していないと気づくことができません。【バンブルフットとは、水かきの裏

の腫れた傷やヒビから細菌が侵入することによって起きる炎症で、悪化すると痛みから歩行困難となり衰弱することがあるようです】

7月7日に受診予約をし、しばらくの間、様子を見ていたのですが、先週2回こはくの足の裏から出血を確認しました。Iさんは、スケッチブックに「こはくは、こころの中で『いたい、いたい』で思ってるのかもしれない。足を上げなくてもふくらんでるのが見える。両方とも足に黒いものついてるけど血が出てるのが左足だった。こはくを守るぞ。こはくの足を守る」と、こはくの足をよく観察した様子と、足を守るという決意、そして、ツムピーとこはくを比較したイラストが書かれ





ていました。毎朝餌をあげているSさんやYさんは、「体重を増やさないようにアヒルフードを減らそう」「何粒あげるか決めたほうがいい」と言って足に負担がかからないよう食事の工夫を始めました。毎朝こはくの水浴びをさせているSさんやYさんはこはくにコンクリートを歩かせないように、ゲージを芝生の隣まで運んで出してあげるようになりました。また、Aさん、Mさん、Hさんは、「先生、ちょっとみんなに伝えたいから時間ほしいんだけど」と言って、しりゅう症についてまとめたスライドを、みんなに発表してくれました。みんな、こはくの足が少しでも良くなるよう情報を共有しながら、それぞれのこはくへの

の関わり方で、こはくの足を守っていました。しかし、こはくの嘔吐をきっかけに動物病院に連れていくと、しりゅう症の症状は重たく、治療も長期戦になると診断されました。1日2回の飲み薬と、1日1回、2種類の塗り薬の生活がしばらく続きます。

朝からこはくの様子を細かく観察する子どもたち。毛づくろいする力が弱い、ゲージの中での移動が少ない、ずっとぼーっとして眠たそう、鳴き声が小さい、人形に興味を示さない、と、小さな変化からこはくの体調を伺おうとし続ける子どもたち。触りたくてたまらないけれど、こはくのために我慢する子どもたち。その1人1人の「こはく元気になって」「こはく頑張ってる」という切実な願いに触れながら、教師自身もまた、私にできることは何か、最大限手を尽くしたいと動かされます。

- ・こはく、しりゅう症痛いよね、くすりもいやだね、でもがんばってね。こはくは今だいじょうぶかなの気持ちでいっぱい、こはくを見るとこはくだいじょうぶかなってすぐ思っちゃいます。こはくのためにできることや、ストレスにならないように触らないこと、こはくをよく見て変化に気づけるようにしたり、コンクリートを歩かせないで芝生をいっぱい歩かせたり、栄養のある野菜やくだものをあげることはできるからそれをがんばりたい。(Mさん)
- ・やっぱりアヒルは痛いところをかくすので、こはくにすきになってもらって、いたいところやつらい時にわたしに見せてくれるように、すきになってもらうためにがんばりたいです。(Cさん)
- ・こはく、硬いところ歩いちゃだめだよ。3年1組はツムピーとこはくがすきなんだよ。だから治ってね。こはくのためにわたしにできることは、硬いところを歩かせないし、元気にさせてあげたいから、健康にいい環境をつくってあげたい。(Rさん)

スケッチブックにこはくへの気持ちがあふれています。こはくのために、ツムピーのためにできることを考え続けながら、一緒に乗り越えていきたいと思います。

「ツムピーとこはくをかってよかったな」

7月7日(金)の七夕の日は、ツムピーとこはくの出会いの日となりました。こはくの成長を待つために自然体験園と教室で別々に生活していた2羽。獣医さんに、ツムピーとこはくが一緒に暮らしてもいいのではないかと教えて頂き、子どもたちに相談すると、「せっかくなら7月7日の七夕にしたらいいんじゃない」とDさんが提案してくれました。普段から、発情で私たちことのを追いかけるようになっていたツムピー。ツムピーがこはくのこと追いかけてびっくりさせるのではないかと、仲良くなれるのかと少し心配していました。しかし、2羽を自然体験園に放すと、近づいていったのはこはくの方でした。一方ツムピーは、驚いたように、こはくが近づいてくると少し離れます。まるで追いかけてくしているような2羽を前に、「ツムピーが自然体験園を案内してるみたい」「こはくはずっとアヒルと過ごしていたから、ツムピーに会えて嬉しいんじゃない」「ツムピーは初めてアヒルに会うもんね」と、嬉しそうに見守る子どもたち。この日を迎えるために、ツムピーは本当にお嫁さんを迎え



たいのか考えたり、怖がっているこはくに少しづつ近づき安心させてあげようと工夫したり、しりゅう症の治療のために自分にできることを働きかけたりと、たくさん話し合い活動しながら、みんなでこの日を待っていました。その分、子どもたち1人ひとりにとって、2羽が出会えた嬉しさや愛おしさもいっぱい詰まった時間だったのではないかと思います。

ツムピーの後を着いて歩いていたこはくですが、初めて見る池を前に、足が止まってしまいます。この池は、子どもたちが「こはくは生まれて今まで1回も大きい池で泳いだことないから、僕たちが作った大きい池で泳がせてあげたい」と言って何日も前から池掃除を続けていました。池に入れてあげると、きれいな水でとても気持ちよさそうに水浴びを始めるこはく。何度も何度も潜り、羽ばたき、池から出てこようとしません。そんなこはくの姿をじっと見つめるTさん。Tさんは毎朝、びしょびしょに濡れながらも池掃除を続けていました。その日のTさんのスケッチブックには、このように思いが綴られていました。

ツムピーとこはくが会ってくれてよかった。ツムピーとこはくを会わせたとき、ツムピーがにげた。こはくがツムピーをおいかけた。こはくははじめて大池と自然体験園を歩いた。こはくは初めてどじょうを食べてくれた。ツムピーとこはくをかってよかったな。池できもちよかった。これからツムピーとこはくは元気にくらしてほしいな。

Tさんの文章の中の、「ツムピーとこはくをかってよかったな。」という言葉。Tさんが、改めてツムピーとこはくを飼ってよかったと感じられたのは、ツムピーとこはくのためにと思いをかけて働きかけ、行動してきた分、目の前の姿から、自分のやってきたことの良さを感じることができたからではないかと思いました。また、私がTさんのこの言葉の思いを考えたくなったのは、私自身もこの時間、Tさんと同じように、この子たちと、ツムピーとこはくを飼っていてよかったなと感じていたからです。ツムピーとこはくと、そして子どもたちと共に過ごせる1日1日、一瞬一瞬を大事に過ごしていきたい、ととてもあわせてかけがえのない時間だと改めて感じられる時間でした。